

聖書のフェミニン・リーディング研究(Ⅱ)

鈴木元子

(3) イエスの系図の四人の女たち

新約聖書の冒頭は、「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」⁽¹⁾(マター・一)から始まる。綴られている名前は殆どが旧約を代表する人物たちであるが、そこに四人の女たちが無造作に投げ込まれているようだ。これらの女たち―タマル、ラハブ、ルツ、ウリヤの妻バト・シエバ―は、一見したところ、後世の信者たちが模範とするような女性たちとは言えない。一体、何故彼女たちが、このイエスの聖なる系図に入れられたのだろうか。

タマルは、ユダの子エルの妻。子供が生まれないうちに夫エルが死んだので、その弟オナンと逆縁結婚をするが、オナンとも死別。舅のユダは三男のシラと結婚させると言いながら、約束を果たさないので、遊女を装い舅により子を得る(創三八章)。ラハブは、エリコの町の遊女。ヨシュアが遣わしたイスラエルの斥候を家に匿ったため、エリコが陥落する際、一家の者共々救われる。その行為は新

約聖書においても賞賛されている(ヘブ二・三二、ヤコ二・二五)。ルツは、モアブの女⁽²⁾。飢饉のためモアブに寄留していたユダヤ人と結婚するが、夫と死別。夫の死後、姑ナオミに従って夫の故郷ベツレヘムに行き、ボアズにめとられてオベドを生み、ダビデの先祖となる。バト・シエバは、ヘト人ウリヤの妻。ダビデは彼女をウリヤから奪い、策を用いてウリヤを戦死させた後、自分の妻とする。ダビデの死に際し、王位継承をめぐる預言者ナタンらに支持され、息子ソロモンの兄アドニヤを退けてわが子を王位に付ける(王上一一―五三)。

これら四人の女たちの共通点は、皆が揃って異邦人であることである。これは、イエスの救済が異邦人にも及ぶことの予兆とも言われている。もう一つの共通点は、彼女たちが社会の周縁の弱者であったことだろう。二度も寡婦となり、近親姦⁽³⁾をしたタマル⁽⁴⁾。遊女であったラハブ。姑をかかえ、貧しい寡婦のルツ。王と姦通したバト・

シエバ。これらの四人のうち、特にタマルとバト・シエバに関しては、アブラハム・カイパーのように、「かかるいまわしい墮落がキリストの系図に織りこまれていくということは、わたしたちのデリケートな感情を傷つける」と首を傾げる者も多い⁽⁵⁾。

当時の女たちは、○○の娘、○○の妻、○○の母として社会に存在した。タマルは罪を犯さなかったが、夫のエルは「主の意に反したので、主は彼を殺された」(創三八・七)。舅の意志でオナンと逆縁結婚⁽⁶⁾をし、タマルは罪を犯さなかったが、オナンは子種を地面に流し、「彼のしたことは主の意に反することであつたので、彼もまた殺された」(一〇節)。タマルは舅の言いつけで父の家に戻るが、これは彼女が娘の身分に戻つたことを意味し、当時の女として使命を果たすことからは遠ざけられる。タマルは父に、夫たちに、その舅にと従順に仕えてきた後、今度は未亡人になつてもユダ家の嫁であるというアイデンティティを喪失しなかつた。もし、彼女自身の場合のためだけなら、他の若い男を誘惑することもできただろう、それは姦淫であつたにしても。しかしユダ家の子孫⁽⁷⁾を生んで母になつてというタマルの願意は(この時代ユダヤ社会では子供を産めない女は徹底的に差別された)、ユダにも正当なことに思えた⁽⁸⁾。旧約時代、神の祝福は女の胎を開かれることと同義で表わされているから⁽⁹⁾、タマルの求めは神の祝福を求める強引な祈りとも受け取れる。あらゆる限りの知恵を絞り、勇気をもって命がけで取つた行動。ここに、女として生を受けたからには女として「生きたい」という、人

間の原初的なエネルギー、古代の女性の種族保存の生命力の強さに出会す。現代なら、自己実現を果たそうとする女ということになるうか。

墮落した女だから、神の人間に対する慈悲深さを示すためにイエスの系図に入れられたのではなく、母になつて「家を絶やさない」使命に生きようと、真剣勝負で「わが生命(子を含めて)」を勝ち取つた女だから、神に嘉せられてイエスの祖になつたと読みたいものである。

タマルの子孫のボアズに求婚するルツの仕方⁽¹⁰⁾である。しかし、ともかくにも、ルツとボアズの結婚は人々と神の双方から祝福を受ける。町の民と長老たちは、「どうか、主がこの若い婦人によつてあなたに子孫をお与えになり、タマルがユダのために産んだペレツの家のように、御家庭が恵まれるように」(ルツ四・一二)と祝福する。(ここでもタマルの行為が非難されていないことは明白である⁽¹¹⁾)。ルツ記の中で、姑のナオミが、そしてルツが、そして町の女たちが、ボアズのことを「家を絶やさぬ責任のある人」と理解している。女性の視点からすると、先祖のタマルには「家を絶やさぬ責任のある人」が中々与えられず、最後の非常手段を取らなければならなかつたが、自分たちにはその男が神から与えられているのだという、神の大きいなる祝福を噛み締めている女たちの姿がここにはある。

ラハブ⁽¹²⁾の社会的位置付けは、彼女の住居の描写の中に現れてい

る。「彼女の家は、城壁の壁面を利用したものであり、城壁の内側に住んでいたからである。」(ヨシュエ一・一五) 男の庇護の下に暮らしていない女が経済的自立を果たすためには、遊女となるしかなかった。売春は最古からの職業で、社会の必要悪として黙認されていたから。ラハブは、自分のためばかりか、身内の者まで養っていたのだろう。しかし、その精神的苦悩は大きかったはずだ。軽蔑され、社会の最底辺層として町の最も外れの壁の中で、ひっそりと息を潜めて、まさに境界人^{マージナル・ペーソン}として暮らしていたのである。エリコの町にイスラエル人たちが攻めて来ると聞き、ラハブの取った態度は、第一に神を認め(悔改)、自分と自分の親族の「生命」を守り通すことであった。

バト・シェバについてカイパーは、ダビデの罪の挑発者であるばかりか、その共犯者で、この記事はバト・シェバのような美貌をもつ全ての女性に対する神の警告であると読む。しかし、そのような読みは、彼女がイエスの系図に入れられている理由の何の説明にもならない。ここで神の摂理は、どう働いているのだろうか。ダビデとバト・シェバの出会いはいくつの偶然で、ある者が推測するようにダビデ王を誘惑するために、故意に見える場所と時間を狙った行動とは到底考えられない。ダビデの行動も、単なる自分の肉欲の処理ではなかったはずだ。宮廷には側女たちが沢山いたのだから。ダビデ王は、わざわざバト・シェバの素性を調べさせ、人妻であることを知った。それなのに、「ダビデは使いの者をやって彼女を召し入

れ、彼女が彼のもとに来ると、床を共にした」(サム下一・四)のである。バト・シェバも、ンセラを殺害したヤエルのように振るまっていない。

一瞬目を交わしたただけなのに、まるでずっと以前から知っていたような、人間と人間との出会い、求めて待っていた自分の半身をととう探し当てたような、そんな感覚に圧倒され、愛し始めてしまう…。この二人の成り行きは、余りにもごく自然に、スムーズに運んでいく。人間が本来持っている不可思議な、けれども最も純粹な愛という何物かが、己の存在をアピールしているかのようだ。そのとき、ちょうど「彼女は汚れから身を清めたところで」(月経終了後から七日後に身を清める⁽¹³⁾)、妊娠しやすい時期だったというのも天の配剤であったのか。呼び戻されたウリヤが家に帰らず、バト・シェバと夫婦関係を持たなかったことも、ダビデの予想を裏切るが、これも摂理であった。ところが、ダビデがウリヤを間接的に殺したことと、好きだけ妻や側女を迎えられるのに部下の妻(当時、妻は夫の所有物)を取って自分のものとした分捕り⁽¹⁴⁾は、神の御心に適わず、罰を受けて彼女との初子は死んでしまう⁽¹⁵⁾。しかし、神はダビデとバト・シェバの二番目の子ソロモンを非常に愛された、とある⁽¹⁶⁾。古今東西を問わず、人々を迷わせるのは、自分の半身との出会いの時期である。ダビデの正妻はサウル王の娘ミカルであるが、この結婚はサウルの策略の路線上にあり、二人に真の愛情は育たない。ミカルはダビデを侮蔑し(サム下六・一六、二〇)、神はミカル

の胎を閉じられている。バト・シェバとダビデに二人目の子供が生まれること自体に⁽¹⁷⁾、神の同意と祝福とを読み取れないだろうか。ダビデは老人になったとき、家臣たちの思惑通りには、美しく若いアビシャグと関係を持つことはなかった。何人もいる子供たち⁽¹⁸⁾の中で、ソロモンを王にする誓いを立てていたことも、それを実行してバト・シェバとその子の命を救ったのも⁽¹⁹⁾、ダビデの真の愛情に根差す行為と取れるだろう。結婚後に配偶者が自分の対関係にある者ではないと悟ったとき、或は結婚後に自分の半身に出会ってしまったとき、愛と法との狭間で一人人間はどうしたらよいか。現代のアメリカ社会の結婚、離婚⁽²⁰⁾、再婚がそれを如実に物語っている。『緋文字』のディムズデル牧師とヘスターの愛における、⁽²¹⁾What we did had a consecration of its own. We felt it so! We said so to each other! の言が想起される。正典の中に入れられた雅歌⁽²²⁾にも、人間のエロティックな性愛の悦びが詠じられているが、女と男の愛の中に潜む「神聖なるもの」とは、本来、神から来ているものではないだろうか。

この四人の女性たちが共通して持っているものは、底知れぬ生命力の強さである。ヤボクの渡しで相撲をとったヤコブが、相手に「祝福してくださいるまでは離しません」(創三二・二七)と迫ったように、生命の保証を(胎が開かれることも含めて)タマルもラハブもルツもバト・シェバも自らの手で掴み取るうとした。「その無残にも踏みにじられそうな中でも、命の道を守り通す、そのような女

性たちをイエスは、福音書の中でも歓迎したし、『あなたの信仰があなたを救った』という表現で肯定する⁽²³⁾のではないか。イエスは姦淫の女に対して、「わたしもあなたを罪に定めぬ。行きなさい」と言って、無条件に赦した(「これからは、もう罪を犯してはならない」は、この物語がヨハネ福音書に受容されたときに加筆されたものである⁽²⁴⁾)。

イエスの系図の四人の女性たちの他にも、旧約の女性たちに関して言えることは、宗教的、政治的、社会的に進出していたことが、数少ない記事の中から読み取れるということだ。キャリア・ウーマンのミリアム(女預言者)やデボラ(士師)、また女の勇敢な行為という点ではユディト(寡婦)やヤエル(主婦)が挙げられる。ユディトは、「女の腕をもって、彼らの傲岸さを打ち砕いてください」(ユディ九・一〇)と主に向かって大きな声で祈った女性で、女の容色を武器に寝室に入ると、短剣でホロフェルネス(アッシリア軍総司令官)の首を落とす。ヤエルは、カンナン人將軍シセラのこめかみに釘を打ち込んで男を殺害する。シセラの帰りを待つ母の、「戦利品を得て、分けているのでしよう、兵士それぞれに一人か二人の女を」(十五・三〇)の言葉から、シセラはイスラエル全女性を辱める敵であったことが知れる。勇気を持って、男の死体の首を真正面から見据える女たちであった。

エステル、ハンナ、七人兄弟の母(二マカ七章)も称賛されている。箴言三二章一〇節の「有能な妻」においても、女たちの主体的

な経済活動や商才が当然のこととして語られている。又、民数記二七章で男兄弟のない五人の娘たちが、父の残した所有地の相続権を叔父たちと同様に求めて、共同体全体の前で訴えを起こすと、神は彼女たちの言い分を正しいと認めている。

読者が女性であることによって、伝統的(父権的)読みと価値評価が逆転するのが、サラとハガルの物語⁽²⁵⁾である。この物語は、ユダヤ人社会では、ガラテヤ書(四・二―三二)にあるように読まれていたようだ。「サラ」対「ハガル」は、「自由な身の女」対「女奴隷」、「天のエルサレム」対「今のエルサレム」、「霊」対「肉」という二元論的図式を支える例証になってきた。しかし、フィリス・トリブルの言を借りれば⁽²⁶⁾、ハガルは抑圧され搾取された忠実な仕え女、主人(白人男性)から弄ばれ子を産まされ売られた黒人女(奴隷)、支配階級の女性によって悪用され捨てられた代理母、法的拠り所のない寄留外国人女性、家出した若い娘、夫に捨てられ身寄りもない妊婦、追い出された妻、子供を連れて離婚した母親、パンと水を入れて紙袋一つで町をうろつく家のない女、権力構造からのお仕着せや福祉で生きている女性、自分を見失っている女たちの姿とオーバーラップされる。彼女たちは、ハガルに自らを同一化して、慰めを得ることができる。

(4) イエスの女の弟子たち⁽²⁷⁾

十二使徒は全員男である。しかし、イエスは女たちを実質的な弟

子とみなしていた、と言っても過言ではないだろう。イエスは男の弟子たちを召し出すが、彼らに対する叱責の言葉もまた多い。父を葬りに行かせて欲しいと言う弟子を、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」と叱責し(ルカ九・六二)、嵐にあって替える弟子たちを、「信仰の薄い者たちよ」(マタ八・二六、マコ四・四〇、ルカ八・二五)と叱る。「永遠の命に至る水がわき出る」(ヨハ四・一四)とサマリアの女に告げたとき、女は即座に「その水をください」(ヨハ四・一五)と応答するが、イエスの永遠の命について聞いた男の弟子たちはつぶやき、「多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった」(ヨハ六・六六)という。パン種に注意しなさいという喩え話も理解できない弟子たちを、「信仰の薄い者たちよ」(マタ一六・八)と再度叱責する⁽²⁸⁾。一番弟子と自負していたペトロでさえ、イエスが弟子たちの足を洗おうとすると、その真意を汲み取れない(ヨハ一三・六―一〇)。さらには死と復活の予告に対しても、イエスをいさめ始めたペトロに、「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている」(マタ一六・二三、マコ八・三三)と怒る。イエスに触れていただくために、人々が子供を連れて来ると、弟子たちはこの人々を叱る。「イエスはこれを見て憤り」(マコ一〇・一四)、手を置いて子供を祝福する。受難を目前にして、イエスがゲツセマネで熱心に祈っていると、弟子たちは眠りこけてしまう。「わがかずか一時もわたしと共に目を覚ましていられたのか。」(マタ二六・

四〇、マコ一四・三七、ルカ二一・四六)

このような男の弟子たちとの関係に比して、イエスと女性たちの関係を調べてみると、誕生から昇天に至るまで、イエスは何時も彼女たちに囲まれていた。マリアは誕生の予告を受け、従順にそれを受容する。救い主を待ちわびていたエリサベトも、老女預言者アンナもこれを祝福する。イエスの貴い真理は、使徒たちにより、むしろイエスと出会う彼女たちに先に告げられている。イエスは、サマリヤの女に自分がメシアであることを告知する(ヨハ四・二六)。咄嗟に、女は町の人々に知らせ、町の多くのサマリヤ人は、「証言した女の言葉によって、イエスを信じた」(ヨハ四・三九)。この行為に、福音宣教の原点を見い出す。また十二年間も出血の続いていた女の「この方の服に触れさえすれば治してもらえ」(マタ九・二二)の信仰は善しとせられ、癒されると同時に、イエスから「あなたの信仰⁽²⁹⁾があなたを救った」(マタ九・二二、マコ五・三四、ルカ八・四八)と、お誉めの言葉をいただく。カナンの女を男弟子たちは追い払おうとするが、女の「主よ、ごもつとでもです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです」(マタ一五・二七)の求めは聞かれ、イエスに「あなたの信仰はりっぱだ」(マタ一五・二八)と誉められる。イエスの伝道旅行に彼女たちも参加し⁽³⁰⁾、「悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにサンナ、そのほか多くの婦

人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた」(ルカ八・二三)。

「マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた」(ルカ一〇・三九)が、「足もとに座って」⁽³²⁾は「弟子」を意味する言葉で、さらには、ベタニヤのマリアにイエスは女性にも知的な面で教育を受ける権利(従来は男性だけの特権)があることを示す(ルカ一〇・三八―四二)。一人の女がナルドの「香油をイエスの頭に注ぎかけた」(マコ一四・三)とき、男の弟子たちは「憤慨して：彼女を厳しくとがめた」(マコ一四・四五)。しかし、イエスはそれを王に対する油注ぎの預言者の行為⁽³³⁾とみなし、さらにはイエスの受難を予見した埋葬の準備の預言者の行為⁽³⁴⁾とも受け取って、「世界中どこでも：この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう」(マコ一四・九)と、その価値を高く評価する。平衡記事のイエスの足に香油を塗る罪深い女に、イエスは「あなたの信仰があなたを救った」(ルカ七・五〇)と宣言する。香油を「イエスの足に塗り、自分の髪で⁽³⁵⁾その足をぬぐった」(ヨハ二・三)マリアは、(次のヨハネ一三章の受難直前の)イエスの洗足の道備えをしたとも解せる。

男の弟子たちの場合、三度目の受難予告のときも(マコ一〇・三七)、主の晩餐の後でさえ(ルカ二二・二四)、彼らの念頭には誰が偉いかという自分たちの序列のことしかなかった。男の弟子たちは逮捕の晩、皆つまづく(マタ二六・三二)とのイエスの言葉通り、「イエスを見捨てて逃げてしまった」(マタ二六・五六、マコ一四・五〇)。

しかし、女たちは「大きな群れを成して、イエスに従」(ルカ二三・二七)い、「遠くから見守っていた。∴イエスに従って来て世話をしていた人々である」(マタ二七・五五―五六、マコ一五・四〇―四一、ルカ二三・四九)。そして、女の弟子に一番にキリストの復活のメッセージが告げられ、「弟子たちに知らせるために走って行った」(マタ二八・八、マコ二六・一〇、ルカ二四・九)と、使徒の使徒としての働きを遂行するのであった。⁽³⁶⁾ところが男の弟子たちは、「しかし彼らは、イエスが生きておられること、そしてマリアがそのイエスを見たことを聞いても、信じなかった」(マコ二六・一二)。「使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。∴『ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち』よ(ルカ二四・一一、二五)」。イエスの復活に対する不信仰は続く。十一人の弟子たちの中には、「疑う者もいた」(マタ二八・一七)ので、イエスは「その不信仰とかなくなな心をおとがめになった」(マコ一六・一四)。「どうして心に疑いを起こすのか。」(ルカ二四・三八)。

イエスの弟子の定義は、イエスの「言葉にとどまる」(ヨハ八・三一)ことであり、かつ愛の奉仕(ヨハ一三・一四―一五、マコ一〇・四三)にその特徴がある。「イエスに従って来て世話をしていた」⁽³⁷⁾女たちは、この弟子の定義を満たすと考えられる。十二使徒の中にはイスカリオテのユダもおり、⁽³⁸⁾ペトロを初めとする他の十一人も、イエスの最も大事なときに居眠りをし、逃亡し、拒否し、懐疑心を

起こすなど、人間の弱さをまるで露呈している。それに比べると、女たちが自分の生活の場で純粹にイエスを受容し、愛し、つき従って仕えた行為は、まさに弟子に相応しいものであると言えよう。使徒の資格は復活のイエスとの出会いにあるとすれば、女たちもその範疇に入れられることだろう。

イエスの墓に行っていた女たちで、名前が記されているのは、「マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子らの母」(マタ二七・五五―五六)、「マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、そしてサロメ」(マコ一五・四〇)である。

初期キリスト教会の時代には、各自の賜物に従って大勢の女性たちが宣教活動を担っていた。使徒言行録には、タビタ(女弟子、九・三六―四三、別名ドルカス)、リディア(後援者、一六・二四)、フィリポの四人の娘たち(預言者、二二・九)の名がある。ローマの信徒への手紙一六章の中にも、フェベ(執事)、プリスカ(家の教会の主催者)、マリア、ユニア(使徒)、トリファイナ、トリフォサ、ルフォスの母、ユリア、ネレウス、ネレウスの姉妹と、沢山の女性たちの名前が出てくるが、日本人にはカタカナ名なので男女の区別が付けにくい。エボディアとシンティケ(福音宣教の同労者、フィリ四・二)、ロイスとエウニケ(テモテの祖母と母、二テモ一・五)もいた。女性たちはペンテコステに聖霊の賜物が降った群れの中に含まれており(使一・一四)、洗礼定式では、男女の区別の終焉が告げられた(ガラ三・二七―二九)。「家の教会」⁽³⁹⁾が多く生まれ、その初期の

指導者たちは女性であったという。(時代と共に家父長制化されていくが。)「女はだれでも祈ったり、預言したりする際に:」(二コリ一・五)の言葉は、逆に、公の場の教会で女も祈ったり、預言をしていたという歴史的事実を物語る。「婦人が教えたり、:」(テモ二・二)の言葉にも拘らず、プリスキラが教会指導者アポロに、夫と共に、「もっと正確に神の道を説明した」(使一八・二六)とある。神の霊のことと推察されるが、旧約のヨエル書に、「あなたたちの息子や娘は預言し」(ヨエ三・二)の言葉があり、預言を現代の説教と解すれば、女性説教者も容認される。

III 神の女性的イメージ

女として聖書を読む行為は、父なる神を中性の神にしてしまうものではない。神の性は、あくまでも神性であって人性ではないから、男でも女でもない。神が男のように、或は女のように描出されていても、それは比喩なのであって、それに対して目くじらを立てたり、その表現を故意に隠蔽しようとする必要もない。例えば、「父」(詩一〇三・一三)、「王なる主」(詩九八・六)、「いくさびと」(出二五・三)などの男性的隠喩もある。また「産みの苦しみをされた神」(申三三・一八)、「わたしは子を産む女のようにあえぎ」(イザ四二・一四)、「産みの苦しみが臨む前に彼女は子を産み」(イザ六六・七)、「乳房に養われ、抱いて運ばれ、膝の上であやされる。

母がその子を慰めるように、わたしはあなたたちを慰める」(イザ六六・二一―二三)などの表現は、神を母親に喩えている。また「わたしを母の胎から取り出し、その乳房にゆだねてくださったのはあなたです」(詩二二・一〇)は、神に産婆のイメージを付与している。さらには、^{はしたま}端女にとって神は「女主人」(詩二三・二)として歌われている。

ヘブル語は、男性名詞と女性名詞とからだけ成っているので、旧約聖書の原典は、男性・女性名詞のバランスが保たれているという。知恵のソフィアや神の霊(聖霊)⁽⁴⁰⁾を表わすルウアハ等は、女性名詞である。「箴言」(八・一九・六)、「知恵の書」⁽⁴¹⁾や「シラ書」の他にも、神の属性としての知恵は人格化されている(ルカ七・三五、一一・四九、マタ二・一九)。神の怒り(父性的愛)も、知恵や霊や慈悲で表わされる神の愛(母性的愛)⁽⁴²⁾によって被われる。「流血の罰を下し:イスラエルの弓を折る」(ホセ一・四―五)怒りの神は、また同時に「エフライムの腕を支えて、歩くことを教え:身をかがめて(優しくこれに)筆者註)食べさせた」(ホセ一・三一―四)母のような神でもある。

イエスも伝道者・牧者としての自らを、子らを集める「めん鳥」(ルカ一三・三四)や「ドラクメ銀貨を十枚持っている女」(ルカ一五・八―九)に喩えている。

結 論

今、昔の偉人のように薪を背に本を読みながら道を歩いていたら、たちまち車に跳ねられて死んでしまうだろう。聖書の「乳と蜜の流れる約束の地」の思想は、先住民のインディアンたちからアメリカの土地を奪った。聖書の勤勉の思想は、資本主義の育ての親となったが、それは結局「バベルの塔」でしかなかったのかもしれない。現代は、むしろ息抜きをすること、趣味を持つこと、視野を広げること、うまくストレスを解消させることの方が教えられている。食べるために働いていた時代は過ぎ去り、今は食べないでやせること、肥満を解消するために皆が躍起となって大金を叩いている。立身出世して偉くなろうと志す者は減り、家族に仕えようとする男性も増えてきている。働き過ぎて過労死しないように、遅く出社する者や家でできる仕事に従事しようとする者も増え始めている。イエスの語った逆転の論理⁽⁴³⁾が、今成就されようとしているのか。

戒律やドクトリンは、今の世の中を生きていくために、どれだけ役に立つのだろうか。罪⁽⁴⁴⁾の概念も変化してきている。この聖書のフェミニン・リーディングから導かれる罪の概念とは、次のようなものになる。男の罪⁽⁴⁵⁾は、女に性暴力を働き、女を支配し、抑圧⁽⁴⁶⁾することにある。そして女の罪は、イエスに肯定されなかった三つの行為に読み取ることができる。第一に、家事に押し潰され、自己を見失い、ノイローゼ気味⁽⁴⁷⁾に他人に八つ当たりするマルタの姿(ルカ一〇・

四〇―四一)。第二に、墓に行った女たちに、白い長い衣を着た若者がイエスの復活を告げ、弟子たちに告げるように言う。しかし、「婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである」(マコ一六・八)。この記事にだけ、使徒への使徒となる大役が神から与えられたのにも拘らず、「臆病の霊」⁽⁴⁸⁾に取り付かれた女性たちの姿が写し出されている。抑圧された状態が長いと、確かに「飛ぶのが怖い」⁽⁴⁹⁾のかもしれない。しかし、「信じる者には何でもできる」(マコ九・二三)という信仰をこそ、社会的慣習より優位に立たせるべきである。第三は、イエスがマグダラのマリアに現れたとき、マリアはイエスにすがりつこうとした。それを制してイエスは、「わたしにすがりつくのはよしなさい」(ヨハ二〇・一七)と言った。この「私に触るな」を、モルトマン・ヴェンデルは、こう解釈している。「彼女は自分自身であらねばならないし、あってよいのである。復活は、自己自身になること、新しい世界への関係のうちに歩む痛みと喜びをもたらす」⁽⁵⁰⁾ものと。古代の男の人たちは、女に生まれてこなかったことを毎朝神に感謝したという。現代でさえ、女の子と分かると嬰兒殺しが行われている国もあると聞く。こんな悲しいことはない。自分の生を呪わずして、神に心底感謝して、女であることに自信をもって生きていってほしい。

このように女性が聖霊に導かれながら、女として聖書を読むことは、塚田理氏の言を借りれば、「これまでの制度的機構を隠れ裏

として行使されてきた△祭司的権威▽△牧師的権威▽を覆すもの」と危険視されるかもしれない。しかし、「むしろ権威を剝奪されることによってかえって真の神の△権威▽を運ぶ器になりうる」と考えて、それは女と男の全体(男性の人間性回復への道をも含めて)への預言者の行為に繋がる読み⁽⁵⁴⁾であると評価できるのではないだろうか。

注

(1) この系図は、「ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスが生まれになった」(マター・一六)と続く。しかしマリアと聖霊とから生まれたのであれば、ヨセフとは(義理の)父・子(養子)の関係で、系図とか先祖・子孫といった関係には無理があり不自然である。イスラエルの家族名は自然(実際)と律法(名目上)のものがあったと注解している者もいる。カトリックの神学者ローズマリー・ラドフォード・リューサーはこう書いている。「だから神の介入があっても、ヨセフが生物学的意味で役割を果たさなかったとは必ずしもいえない。少なくとも、新約聖書のもとになったいくつかの伝承の中には、はっきりとヨセフをイエスの父とみているものがある。また、そうみなければマタイの記す、イエスとダビデをつなぐあの系図はまったく無意味なものとなる。」(加納孝代訳『マリア――

教会における女性像』、新教出版社、一九八三年、五二頁)。(2) ルツはモアブ人で、その先祖モアブは、ロトの姉娘が実父によって産んだ子供である。「姉は男の子を産み、モアブ(父親より)と名付けた。彼は今日のモアブ人の先祖である。」(創一九・三七)ルツは自分の先祖であるロトの姉娘の近親姦の罪を贖うのか。ここにも神の摂理の不可思議さが象徴的に表わされている。

(3) いうべき性関係については、レビ記一八章に記載されているが、男性を中心に書かれたものであるため、肉親の女性、母、父の妻、孫娘、父の妻の娘、父方母方のおば、おじの妻、嫁、兄弟の妻、一人の女性とその娘と孫娘、妻の姉妹、との近親姦は禁止されているが、女性が近親の男性を犯すことについては何等記述がない。

(4) 近親姦の前例は、「わたしたちのところへ来てくれる男の人はいません。∴父から子種を受けましょう」(創一九・三二―三三)のロトの娘たちで、それほど子孫を得ることが第一優先事項であったことが伺い知れる。

(5) アブラハム・カイパー(中村妙子訳)『聖書の女性/旧約篇』(新教出版社、一九八〇年、一九八七年)六七頁。その他同様な見方は多い。「どう見ても、これら四人の女性は系図の汚点である。あえてこの汚点を記しているのは、(一)メシヤの中にも不倫の汚れがあり、∴ユダヤ人の高慢をくじくた

め、(二) 罪に対する神の恵みの勝利を示すため、(三) :
メシヤの血統の中の汚点に彼らの注意をひくことによって、
神の選ばれた神の子の母、処女マリヤに対する誹謗を止めよ
うとしている。」(『新聖書注解新約』いのちのことば社、
一九七三年、一九七六年、七五頁)。

(6) 「家名の存続」兄弟が共に暮らして、そのうちの一人
が子供を残さずに死んだならば、死んだ者の妻は家族以外の
他の者に嫁いではならない。亡夫の兄弟が彼女のところに入
り、めとって妻として、兄弟の義務を果たし、彼女の産んだ
長子に死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルの中か
ら絶えないようにしなければならぬ。」(申二五・五六)。

(7) ユダはカナン人の娘と結婚し、タマルもカナン人と思われる。
そこで、ユダの長子エルと次子オナンが子供のないまま死亡
しているから、このまま行けばユダの系列が消滅することに
なる。

(8) 「ユダは調べて言った。『わたしよりも彼女の方が正しい。』」
(創三八・二六) また、「ある地域では死者の父が寡婦をめとる
ことが許されており、この種の結びつきは合法的であるとも言
われる(クライン)。」(『新聖書注解旧約』、二三五頁)。

(9) 子供がどちらが多いかという子供の人数で、一人の男の妻た
ちが嫉妬し合ったり、争ったりした。「エルカナには二人の
妻があった。一人はハンナ、もう一人はペニナで、ペニナに

は子供があったが、ハンナには子供がなかった。：彼はハン
ナを愛していたが、主はハンナの胎を閉ざしておられた。彼
女を敵と見るペニナは、主が子供をお授けにならないことで
ハンナを思い悩ませ、苦しめた。」(サム上一・二、五一―六)
同様に、サラとハガル、レアとラケル(創二九・三一―三〇・
二四)は、子供のことで相争った。その他、「ギデオンは
多くの妻がいたので、その腰から出た息子は七十人を数えた」
(士八・三〇)。また、ダビデの妻たちと側女たちとから生ま
れた子供については、サムエル記下三章二節から五節と、五
章一三節から一六節に記載されている。ダビデの子ソロモン
にあっては、「彼には妻たち、すなわち七百人の王妃と三百
人の側室がいた。」(王上一・三)。

(10) 元来、オスの性は「求める性」で、メスの性は「選び、生む
性」であるという。「メスは質のよいオスを選び、オスは一
匹でも多くのメスに自分の遺伝子を伝えようとする。」(大島
一八七頁) 最近女性の方からの求婚が増えているようだが、
ルツはその元祖といえる。

(11) 「タマル物語(創三八・一三以下)は朗読され解説される。」
(『ミシュナー』メギッラー、四・一〇)。

(12) 絹川、前掲書、一七一―二〇一頁。

(13) レビ一五・一九―三三。

(14) ナタンの諭え話は、分捕りについて語っても、姦淫について

は話っていない。

- (15) このときのダビデの心境は詩編五一篇に歌われている。「ダビデがバト・シェバと通じたので預言者ナタンがダビデのもとに来たとき」(二節)との但し書きが添えられ、聖書全体の中でも罪の赦しを希求する人間の普遍的叫びの歌となっている。「ヒソプの枝でわたしの罪を払ってください、わたしが清くなるように。わたしを洗ってください、雪よりも白くなるように」(九節)の聖句は余りにも有名である。
- (16) ダビデは、サウル王のように、神の契約から落とされることはない。この観点から見ると、サウル王には一人の妻(サム上二四・五〇)と一人の妾(サム下三・七)しか記録されていない。
- (17) バト・シェバとウリヤの間には子供がいなかったという事実も見逃せない。そこに神の祝福は見えない。ナタンの諭え(サム下二二・一四)は、ダビデを悔い改めさせるためのものであるから、ウリヤとバト・シェバの愛情関係については不明である。
- (18) サム下三・二一五、五・一三三―一六。
- (19) 「このままで、わが主君、王が先祖と共に眠りにおつきになれば、わたしとわが子ソロモンは叛逆者になってしまいます。」(王上二・二二)
- (20) 結婚式の対極にあるものとして、離婚式を済ませるカップル
- (21) Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*, The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne, Vol.1 (Ohio: Ohio State University Press, 1962, 1983) 195.
- (22) リューサー『マリアー―教会における女性像』、三二―三三二頁。
- (23) 絹川、前掲書、二〇〇頁。
- (24) 荒井、前掲書、一八二頁参照。
- (25) ハガルの井戸(ベエル・ラハイ・ロイ)は、皮肉なことにサラの愛息イサクがリベカと結婚後住む居住地となっている。(創一六・一四、二四・六二、二五・一一)。
- (26) フィリス・トリプル(河野信子訳)『旧約聖書の悲しみの女性たち』(日本基督教団出版局、一九九四年)六八頁参照。トリプルはこの書物の中で、四人の女性―ハガル、王女タマル、名前のない女、エフタの娘―を取り上げ、時代と社会の不条理ともいえる制約の中で翻弄された女性たちの苦悩を読み取り、これらの女性たちの中にキリストの苦難の僕姿を見ている。
- (27) メアリ・デイリー(岩田澄江訳)『教会と第二の性』(未来社、一九八一年)、四九―五七頁。
- (28) 「まだ、分からないのか。悟らないのか。心がかたくなになっているのか。目があっても見えないのか。耳があっても聞こ

えないのか。覚えていないのか。」(マコ八・一七一―一八)。

(29) "Liturgy" のギリシャ語には「信賴」の意味も含まれている。

(30) 女たちを伝道旅行に同伴したり、女たちの家に入って彼女たちに教えを説くなどの例はラビ文献には皆無で、それらはスキャンダラスな行為と非難される類のものであった。(荒井、前掲書、三五―三六頁参照)。

(31) "ὀλιγόπλοοι" 「仕える」は、イエスの弟子の一つの特徴。

(32) 「足もとに」 "tribus pedibus" は、パウロがガマリエルの「ひざもとで」(使二・三、口語訳) 厳格な教育を受けたというときに使用されている語で、イエスの教えに聞き入るマリアの姿に弟子性を読み取ることができる。

(33) 女の「香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた」(マコ一四・三) は、預言者「サムエルは油の壺を取り、サウルの頭に油を注ぎ」(サム上一〇・一) と類似。他に、祭司ツァドクがソロモンに油注ぎをした(王上一・三九)。メシアとはヘブル語で「油を注がれた者」という意味で(ヨハ一・四一)、そのギリシャ語訳がキリストである。神はイエスに油注ぎをし、神とイエスは今度「はキリスト者に油を注ぐ」(ヨハ二・二〇等)。

(34) 「安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、

サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。」(マコ一六・一)。

(35) イエスは手拭いで弟子たちの足を洗ったが、この女は女の象徴とも言うべき自分の髪でイエスの足を拭った。その愛は計り知れず、イエスは、「この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさと分かる」(ルカ七・四七) と言っている。

(36) 「西方教会の伝承がマリアに『使徒たちへの使徒』 apostola apostolorum という称号を与えている。」(ステイーヴン・C・バートン「女性、イエス、福音」ホロウェイ、前掲書、九七頁)。

(37) "ὀλιγόπλοοι" (マタ二七・五五、マコ一五・四一) の語からイエスの弟子を証明。

(38) 「わたしの信賴していた仲間、わたしのパンを食べる者が、威張ってわたしを足げにします。」(詩四一・一〇)。

(39) フィオレンツァ、前掲書、二六三―二九九頁。

(40) 「排除されてしまった古い伝承には、聖霊の母性伝承があります。」(J・モルトマン『女の語る神・男の語る神』、二八頁)。

(41) 「知恵は人間を慈しむ霊」(知一・六) 「万物の制作者、知恵」(七・二二) 「知恵は…神の善の姿」(七・二六) で、ソロモンは知恵を愛し求め、花嫁とすることを願った(八・二二)。

(42) 「胎児は母親の一部であり、必要とするすべてを母親から受ける。母親は、いわば子供にとっての世界なのである。」(フロム、二五頁)これを聖書の言葉で表現すると、「我らは神の中に生き、動き、存在する。」(使一七・二八)。

(43) 数の大小の逆転(マタ一八・六、一八・一〇、二五・四〇、ルカ一五・七、空間の広狭の逆転(マタ七・一三―一四、ルカ二三・二四)、時間の前後の逆転(マタ二〇・八一―一六、一九・三〇、ルカ一三・二九―三〇)、身分の上下の逆転(マタ一八・四、二一・三二、二三・一二、ルカ一・五二、九・四八、一四・一一、一八・一四、二三・二五―二七)、尊卑の逆転(ルカ一六・二五)、苦楽の逆転(ルカ一六・二五)、運命の逆転(ルカ一・四三、一七・三三)、幸・不幸の逆転(ルカ六・二〇―二二、二四―二五)、貧富の逆転(ルカ一・五三、一八・二五)、強弱の逆転(ルカ一・五一、ニコリ二・一〇、ヘブ一・三四)、処世術としての逆転(ルカ六・二七―三〇)。イエスが価値の逆転を図ることは、旧約聖書の中で既に預言されている(イザ二・一一―二二、一七)。

(44) 例えば、解放の神学ではこのように記述されている。「救い主キリストは、我々を罪から解放する。罪とは、あらゆる友情の断絶と、あらゆる不正と抑圧の、究極的な原因である。キリストは、人間を真に自由にする。つまり、人間を、キリストとの交わりの中に生かすのである。これこそ、全ての人

間の兄弟愛の礎である。」(G・グティエレス、関望・山田経三訳『解放の神学』、岩波書店、一九八五年、四四頁)「差別の罪は神の『かたち』(創一・二七)としてある人間の被造性を否定し、すべての人間が例外なく神によって祝福されるという、救済信仰の内容を否む。人間が神の姿に創られたとは、人間が自分でしっかりと歴史の主体となって、その責任を負うこと、そしてあらゆる疎外と闘い、自身と他者とを贖うため、現実の生のなかで力を行使することである。」(栗林輝夫『荊冠の神学』新教出版社、一九九一年、三五頁)。

(45) 「私たちは、神学的麻醉を使い、強姦、家庭内暴力、身体的・性的児童虐待、そしてセクハラを、包括的に『罪』に分類する。それによって、これらの、父権制社会における私たち自身の男性としてのアイデンティティに根ざす、主として男性の行動を男性の罪と呼ぶと必然的に生じることになる苦痛をとまなう再考を避けるのである。」(ブライアン・レン「言語変化と男性の悔改め」ホロウェイ、前掲書、二二八頁)。

(46) 抑圧されるとは、ありのままの自分よりもずっと小さい何者かへと強制的に押し込められてしまうこと。そこでは、「自分の身体的、情緒的、理性的、そして精神的資質のレベルよりも以下の生を生きるように強要されている」(ゼレ、前掲書、九七頁)。

(47) 「主はお答えになった。『マルタ、マルタ、あなたは多くの

- ことに思い悩み、心を乱している。』(ルカ一〇・四一)。
- (48) 「神は、おくびょうの霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊をわたしたちにくださったのです。」(ニテモ一・七)。
- (49) アメリカの現代女流作家エリカ・ジョング (Erica Jong) の小説の題名 (*Fear of Flying*)。
- (50) モルトマン＝ヴェンデル、『女の語る神・男の語る神』、一六五頁。
- (51) 「聖霊はつねに、昔の物語を伝える新しい方法を見つけようとしている。」(クロトウェル、前掲書、五頁)。
- (52) 佐藤敏夫・高尾利数編『教義学講座第二卷』(日本基督教団出版局、一九八二年)、一五七頁。
- (53) 「この不具にされた生物は真のパートナーではありえないのであって、彼女は男性をその孤独へと投げ返す。」「男性もまた女性を不具にすることによって、自己崩壊の過程にとりこまれてしまっている。」(メアリ・デイリー、前掲書、一四六頁、一七六頁)。
- (54) 「そのとおりかどうか、毎日、聖書を調べていた。」(使二七・一一)。

*引用聖書は日本聖書協会の新共同訳聖書を使用した。また引用の際には略語で記した。

〔平成七年(一九九五年)十月三十日 受理〕

